



文部科学省
IB教育推進コンソーシアム

TEACHER TESTIMONIAL



星匡浩氏(大阪女学院高等学校)

2016年に関西学院大学を卒業し、大阪女学院の国語科教諭の道へ。

現在は高校3年理系2類の担任で4月からは文系主任も務める。IBの担当は4年目。

IB2期生の「文学」、5期生の「現代の国語」と「言語文化」を受け持つ傍ら、古文・漢文の授業も担当。

「生徒も教員も共に学んでいく。IB教育で普遍的な力を育み、平和を作り出していく人材に期待」

「真理を追究できる力」を生徒につけさせたいと 模索した末に出会った国際バカロレア教育

私が国語教員を目指したきっかけは、高校生の時に受験や家族関係、友人関係に悩んだ時に本に救われた経験があったからです。しかし、大阪女学院に着任し実際に国語教師として過ごしている中で、本校の校門にある「真理はあなたたちを自由にする」という聖書の言葉を毎日見ながら、自分は真理を追究できるような力を生徒につけさせることができているのかと自問自答することがありました。

そんな中で、本校のIB導入が決まり2018年に候補校になった際、私はまだ教員2年目で、授業でアクティブラーニングに取り組み、やっと手応えを掴み始めた時期でもありました。候補校から認定校にという動きの中で、本校の国語科は全員がIBワークショップに参加し、教育理念やIBの学習者像への理解を深めていきました。様々な知識を得たり、ディスカッションや課題を繰り返したりする中で、毎日新たな発見や学びがあり、大変でしたが楽しくて刺激的な3日間でした。自分が正にIB教育を受けているようで、私が求めている教育はこれだと体感しました。また、他校の先生方との情報共有や作品の分析についての熱い議論なども自身の視野を広げる良い経験となりました。

IBの使命において特に共感したのは「平和を求め、日々学び続ける人を育てる」という点です。IB教育は学習者に対して、コミュニケーションができる人、挑戦する人などの学習者像を求めます。常に学習者像を意識して過ごすのは難しい面もありますが、こまめに学習者像に立ち返ることで少しずつですが生徒が目指すべき姿に

近づいていくのを実感しています。たとえ授業中に生徒がうまくいかない瞬間があっても、良かった点を指摘した上で、前向きな声かけをすることを心がけています。

文学を教える中で、教科横断的な学習を試み、 ATLスキルを共有する

日本語文学では、2年間で13冊のテキストを学習していきます。私は出身が宮城で東日本大震災を経験しました。その経験を通して不条理に向き合う人間の姿に関心を持ち、国内外問わず「不条理」をテーマとした作品を選ぶことが多々あります。海外の翻訳文学などを扱った時には、必ずその国の社会背景や文化などの知識も必要になってきます。授業でも歴史などと絡めて学びを深めていきますが、生徒は他教科で学んだことと文学の繋がりを発見することが楽しいようです。私自身も歴史の教員とコミュニケーションを取り、共通の話題で生徒の興味を引くように心がけています。国語教育に関しては、生徒が何を目的とした授業なのかと分からなくなることがありますが、ATLスキルは画期的で、それを元に獲得するスキルが「教える側」と「教えられる側」にも明示できるのは非常に有益だと感じています。單元ごとのねらいを定める上でも重要です。それを生徒と共有して授業を行い、振り返るという一連のプロセスの中でも、スキルの認識が非常に重要であると考えています。目標の明確化は、教師と生徒の両者のモチベーションの向上につながります。IB教育に携わって4年目になりますが、とにかく授業に向かうのが楽しいです。

批判的思考力や分析力など 社会に出ても通用する力が育っている

普段、私たちはニュースや、映画、新聞記事などいろいろな情報にさらされていますが、生徒はそれを自然に分析する癖が身についたと話してくれます。それは、学校の中に留まらず、広く社会に出た後も通用する力で、IB教育を通して批判的思考力や分析力を身につけさせることができた結果なのだと感じました。オープンキャンパスの際にも、そんな生徒たちの姿がありました。IBの良さ、知識を実感しているからこそ、自発的にIBのことを広めたいと挙手する生徒。訪れる保護者の方のニーズを拾って、小さいお子さんのいる方のために託児所のようなものを運営する生徒。平和を作り出すために積極的に奉仕しようという姿勢は、本校の理念にもある「愛と奉仕」の精神と重なるものがあり、いろんなものに挑戦しようとする気持ちを強く感じます。

また、私自身にも大きな変化がありました。生徒に多くを求める分、教師の方にもIB教育者としての姿勢や膨大な知識量、それに伴う予習が求められ非常に心身共に大変なものでもあります。ただ生徒にIB学習者像を意識するようになっていたので、自分も意識しなければと日々過ごしています。生徒が求めるタイミングで的確にファシリテイトできるよう、これまで以上にテキストをあらゆる角度から読んで、多くの資料や論文も読むようになりました。生徒は学習の記録としてポートフォリオをつけますが、私も毎回の授業の振り返りをする中で、教員としての力や物の見方が広がっていると実感しています。そして、それがIB以外のクラスの授業や文学分析にも活かしています。

これまでの教育だと、最終ゴールは大学入試であるという生徒や教員の共通認識があったように思います。試験で良い点数を取るためには、試験の中で作品を作問者が求めるように「正しく」読み、分析することが求められます。そのため、「正しい」読み方を教えるという知識伝授から脱却しきれない授業があったと感じています。しかし、今のIB教育の概念中心の学習によって、知識の暗記だけではなく、生徒は初見の文学作品に対しても自ら問いを投げかけ、様々な角度から分析できるようになっています。

IB教育を経験すると、IBクラス以外の授業にも活かせると感じて、こうしたい、ああしたい、こんな力を身につけさせたいという気持ちが生まれます。明確な目標

を持って授業を作り上げることができるので、授業もしやすいと感じます。そして、説得力のある論拠があれば自分の意見が認められることが何よりも魅力です。生徒の可能性を阻まず、一人ひとりの個性を最大限尊重することにつながるからです。IB教育はまだマイノリティーで認知度が低く、国内外の大学へ本当に進学できるのかと不安に思っている方も多くいます。本校ではそのような不安を解消するために、IB1期生から5期生の保護者全員で情報交換をしてもらう場なども設けるようにしています。

IB教育に関心がある方々へのメッセージ・アドバイス

IB教育は、生徒も教員も協働して学ぶことができる教育カリキュラムです。私は、教員として生徒が自分を超えていくことが楽しみです、生徒と教員という上下の関係を超えて、共に学び続ける仲間と捉えています。つまり、今までの一方的な授業のイメージとは全く異なるものです。そして、日本がこれから向かおうとしている教育とIB教育は、新学習指導要領の内容を見ても親和性が高いと考えています。IB教育は、携わる・携わらないに関わらず、その理解を深めることで普段の授業や生徒の関わり方に活かせるエッセンスがたくさん詰まった教育プログラムなのではないでしょうか。

IBへの垣根を無くしていくために、誰もが気軽にアクセスし、学ぶことができる環境づくりを進めることが重要です。また、IB教育で身につけられる力は普遍的だと思っています。貧困、差別、戦争など、本当に今の世界は不条理なことや多くの諸問題に溢れています。しかし、そのような困難な状況だとしても、IB教育で学んだことを活かして変化に適応し続け、何が最適かを批判的な思考力をもって日々考え続けることで、それが最終的に世界の平和を作り出すことに繋がると期待しています。

